

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	宣 昌 大
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 清 田 哲 男 副主査：（上越教育大学教授） 松 尾 大 介 委 員：（上越教育大学教授） 松 本 健 義 委 員：（岐阜大学教授） 山 本 政 幸 委 員：（岐阜大学准教授） 隼 瀬 大 輔
3. 論文題目	造形活動における感受・知識・他者が学習者に影響を及ぼす際の身体への意識変容についての研究
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 宣昌大氏 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和6年2月24日（土） 9時00分～10時30分 場所：ZOOMによるオンライン実施 1. 学位論文の構成と概要 ＜本論文の構成＞ 序章 研究の動機と概要 第1節 研究の動機と課題への意識／第2節 本論におけるリサーチクエスション／ 第3節 本研究の構成 第1章 身体で感受する指導の実態 第1節 学校教育と体性感覚、触覚／第2節 感覚と身体／第3節 諸感覚／ 第4節 クロスモーダル知覚と共感覚／ 第5節 まとめ 身体感覚で美術教育活動を捉えるために 第2章 感覚が学習へおよぼす影響 第1節 触覚とオノマトペ／第2節 本調査における学術背景／ 第3節 中学校学習指導要領における美術科での感覚の取り扱い／第4節 本調査の概要／ 第5節 調査の対象とする授業題材の検討／第6節 授業の実施と作品からの検討／ 第7節 中学生のアンケートによる触ることへの意識の変化の検討／第8節 本章のまとめ／ 第9章 調査の総合考察と今後の課題 第3章 感覚と知識が表現へおよぼす影響 第1節 調査での目的と背景／第2節 調査の概要／第3節 調査での仮説／ 第4節 本調査での集計結果と分析／第5節 本調査での考察／ 第6節 調査の総合考察と今後の課題 第4章 他者の見方が表現へおよぼす影響 第1節 はじめに／第2節 調査の概要／第3節 仮説／第4節 調査結果と分析

第5節 生徒の観察傾向の視座の推移／第6節 考察／

第7節 調査の総合考察と今後の課題

第5章 外界の価値の感受による自己の価値との出会いの過程の検討

第1節 調査の目的と背景／第2節 調査の概要／第3節 調査結果と分析／

第4節 考察／第5節 調査の総合考察と今後の課題

終章 結論

第1節 本論の成果に基づく新たな感受と行為のサイクルモデルの提案／

第2節 本論の成果による展望

<本論文の概要>

本論文の課題となる背景となる現在の美術教育研究では、合理的な学習方法に基づく実践によるものが散見されている状況である。しかし、誰にとっても同じ答えを生み出すのではなく、自分自身と社会とを結びつけるために、自分なりの答えを創造する学びが、未来を幸福に生きていくために必要であると申請者は認識した。そのため、創造活動の起点として、自己の内面と社会とをつなぐ重要な存在である身体感覚に注目している。しかし、造形活動における身体感覚についての研究は非常に少なく、身体感覚が新しい価値創造に与える影響は明確になっていない現状でもある。そこで、①感覚と表現との関係、②知識の影響、③他者の見方からの影響という3つのアプローチから、身体感覚と個人にとっての新しい価値創造との関わりを明確化する論考を行った。

第1章では、感覚と知識についての先行研究から、美術教育と身体感覚の関わりについて考察している。まず、新たな価値を生み出すことは、中動的な感受を意識することが重要であることを示した。しかし、これまで美術教育学で検討してきた身体感覚は漠然としたものであり、身体が多感覚間の相互作用を扱う論考が多くないことを指摘している。さらに、身体知に関する論考から、身体運動および行為は、周囲の環境と自身の身体との関係の中で判断されていると考えられることを論じている。また、先行研究より、オノマトペによる名称の音韻と、それが表す感覚イメージとの間による体系的な結びつきから、対象を言語化しにくくとも、オノマトペであれば、その音から質感を他者と共有しやすい点についても整理した。

第2章では、触覚を働かせて対象と関わった時に生じる生徒の表現の変容を調査分析し、感覚が表現に与える影響について考察している。オノマトペの文字デザインを行う授業の中で、触覚を意識的に働かせる場面を取り入れ、感覚体験が表現に与えた影響を分析している。その結果、以下の3つの傾向があることを明らかにしている。①触覚への意識が高いほど、他者に意図が伝えやすい視覚的な作品を制作しやすくなる傾向。②触覚と記憶や概念との関係が高くなると、独自性が高まり、他者に意図が伝えにくくなる傾向。③触感と、その音声的表現である擬態語を、造形要素に置き換えることによって、生徒の触覚へのイメージが鮮明化される傾向である。

第3章では、知識や情報によって記憶や経験と結びつく際の自身の感受の変容について調査し、その結果について検討を行っている。感受は、個人と外界との相互作用に留まらず、想起された知識などが影響することが想定される。そのため、鑑賞対象となる作品に関する知識の有無によって、鑑賞者の見る行為や触る行為、あるいは発話等を含む鑑賞態度の変容について調査対象を焦点化している。そして、作者を知らずに鑑賞した場合と、作者に関する知識を知って鑑賞した場合との、対象との関わり方を生徒の姿から考察している。その結果、学習者にとっての新たな知識が感受しようとする身体の行為に影響することが明らかにしている。

第4章では、美術授業での班活動等相互学習を記録し、観察の視座の変化について分析することで、他者が感受に与える影響について考察している。授業内容は、触覚、嗅覚、聴覚を対象として、特定の感覚を意識した活動である。その結果、相互学習で特定の感覚を意識した活動から、感覚で捉えた事象を相互に交流し合うと、個人の観察態度が変容し、他者の視座の影響を相互に受け合う可能性があることを明らかにしている。そして、自身の身体感覚を働かせるためには、個人で対象と関わるだけでなく、他者を自分と異なる身体感覚を持つ存在として認識し、交流することの重要性を示唆している。

第5章では、中学校美術科での授業における感受と造形表現行為、および主題生成の関係について生徒の姿を多角的に分析し、検討している。そして、これまでの各章で得られた知見を活用しながら、生徒の記述を基にした量的な分析や、生徒が実際に感受している様子を映像から質的な分析を行うことで、生徒の様子を精緻に見取った。その結果、感受から主題生成した生徒は、感覚的に作品制作に向かう傾向が明らかになり、自分とは異なる存在を認め、その他者を理解しようとすることで、自分自身の感覚や興味に気付くことができる可能性を示唆している。

終章では、自己の内面と外界をつなぐ身体について、感受と行為のサイクルモデルを用い、改めて第2章から第5章までを概観し、以下の3点から総括的に考察し、結論としている。

- ① 触ったことをオノマトペや音声言語に置き換えることでイメージが鮮明化すると、触った感じを他者に伝えやすくなり、また、独自性の深まりがみられた。また、触ることで外界を整理、抽象化するなど、自分なりの価値を見出しやすくなる傾向が確認された。
- ② 他者によってもたらされる新たな知識が、それ以前の自己の知識や記憶に依る見立てをはじめとした主に視覚的情報での感受から、他者へ思いを馳せるよう触覚をはじめとした多感覚での感受へと変化し、それに伴った自己の内面の変容が確認された。
- ③ 互いに異なる視座である他者の存在が、共に感覚を通じた観察を行うことで、相手の視座を自分に取り入れる傾向が確認された。

以上のことから、知識や記憶、他者の影響を受けることで、造形活動における身体への意識変容は、合理的な学習では得られにくい、個人にとっての新しい価値に向かう創造的な営みであるという結論に至っている。これまでの先行研究では、表現活動や鑑賞活動での、個人の感覚の一部に限定した身体の働きによる感受や知識、記憶の影響による意識の変容についてのみ議論がなされてきた。しかし、本研究では、他者の存在による感受への影響と、その影響が能動的な関わりだけでなく、中動的とも言える新たな関わりによって変容することについて述べたことが本研究の新規性であり成果であると考えられる。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、3編の全国学会誌の査読付き学術論文から成っている。日本美術教育学会誌『美術教育』（単著、第305号、2021年）、日本基礎造形学会誌『基礎造形』（単著、第31号、2023年）、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集』（単著、第24号、2024年3月掲載予定）である。以上の成果と内容について、5名の審査委員が討議した観点は、以下の通りである。

（1）研究の目的と論文構成との整合性について

本研究では、①感覚と表現との関係、②知識の影響、③他者の見方からの影響という3つのアプローチから、身体感覚と個人にとっての新しい価値創造との関わりを明確にすることを目的としている。そのため、実態に基づく検証を行うために、第2章から第5章までの各章で論じる4

つの調査を実施し、その結果について考察することで研究目的に迫る論考である。まず、第1章では、本研究の基盤となる、知識と感覚の概念について、理論研究の先行文献を基に検討している。そして、第2章では①感覚と表現との関係、第3章では②知識の影響、第4章では③他者の見方からの影響から生徒の行為をトランスクリプト等質的に検討し、生徒の価値生成についての傾向をそれぞれに導き出している。そして、3つの調査の傾向から、3つの関わり合いを効果的に活かすことができる授業の仮説を立て、傾向を教育現場で活かすことができるかについて仮説に添って検討を行っている。その上で、終章では、これまで繰り返し行ってきた調査と検討を再度俯瞰し、本研究の結論として纏めている。このように論理の筋道と調査目標が連動しながら検討を繰り返し、研究目的である生徒と価値生成の在り方の傾向を確認していることから、極めて精緻に論旨を組み立てていることが認められた。

（2）研究の独自性について

本研究では、造形活動における身体感覚を通した意識変容に焦点化しており、これまでの美術教育研究ではなかった視点での学習者の見取り方の提案は、極めて独自性が高いと言える。ポストモダン以降に再度固定化あるいは形式化していった造形要素への関わり方、延いては美術文化に対しての現代的な新たな問いを含んだ研究テーマである。また、本研究で実践された授業は、中学校での美術教育でこれまでなされにくかった社会構成主義的なアプローチであり、学習する新たな資質・能力の提案にも繋がる可能性を秘めている。学習者の触覚による感受の視覚化、他者の思考の影響の視覚化の試みは今後の美術教育研究の手法として、後進の研究者に影響を与えるものと考えられ、高く評価された。

（3）今後の発展性について

本論では、申請者の勤務校の生徒の学習活動の姿から、研究目的である感受と表現との関係の変容を明らかにしようとした。そのため、本論では、美術教育活動へ新規性のある視点による考察の試みとして極めて高く評価されるが、この視点で、学校や異なる文化圏の児童生徒に活動にさせることによって多様な属性について3つのアプローチでの傾向を整理することが可能となる。感受による人間の価値生成の構造に迫るために、知識や記憶、他者の影響以外の要素の抽出のためにも今後、異なる属性の学習者への調査への発展性について期待ができる。

（4）学校教育の実践への貢献について

第2章から第5章での、調査と授業実践との関係としても、これまでの美術教育での実践学とは異なる方法が用いられていた。調査方法、分析手法に合わせて授業をつくるのではなく、生徒が育むべき力や、授業目標、ねらいを明確にした極めて優れた授業実践での生徒の観察であることが高く評価された。さらに、これらの実践での生徒の観察から分析を行い、設定する新しい課題が、研究対象としても授業改善としても両方に機能する構造となっている。これまでにない、研究と実践の新しい往還の在り方として、これからの実践者にとってのロールモデルの一つとなり得る秀逸な実践研究の連鎖として特筆すべきである。

また、第4章で用いられた「感覚タイム」の実践は、これからの教育現場だけでなく、大学での感受体験のプログラムとしても有効であると評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 宜昌大 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。